



韓国・尹錫悦新政権の外交：「地域大国」目指し国際的地位高める戦略を志向か

木村， 幹

(Citation)
nippon.com

(Issue Date)
2020-05-09

(Resource Type)
article

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100478233>



「韓国は我々が思っているより国際的に成長した国だ。大きくなった規模にふさわしい考えと行動を実践に移す時だ。そうしてこそ国際社会で尊敬され、信頼を勝ち取ることができるのだ。」

2022 年 5 月 10 日、韓国にて新大統領である尹錫悦の就任式が行われる。冒頭はそれに先立ち、尹錫悦の有力な外交ブレーンの一人であり、韓国における日本研究の第一人者であり、また、新大統領がアメリカと日本に派遣した二つの代表団の双方に、唯一参加した、朴喆熙ソウル大学教授が記した文章の一節である。

尹錫悦政権は、韓国において 5 年ぶりの保守派政権になる。周知の様に前任者である進歩派の文在寅は、圧倒的に、北朝鮮との対話とそれによる朝鮮半島における平和の実現に比重を置く外交政策を進めて来た。その努力が 2018 年の、劇的な南北首脳会談、そしてシンガポールでの初の米朝首脳会談へと繋がった事は、我々の記憶に依然として新しい。

北朝鮮との対話には積極的な姿勢を見せた文在寅政権は、他方、朝鮮半島外の問題には大きな関心を見せなかった。典型は中国を巡る問題であった。同盟国であるアメリカが中国への対決姿勢を強める中、文在寅政権は旗色を鮮明にはしなかった。とはいえその事が、彼等がアメリカより中国を重視した事の表れであったかと言えばそうとも言えなかった。北朝鮮との対話を重視する文在寅政権にとって、同盟国であるアメリカの協力は不可欠であり、だからこそその関係が重視されたからである。他方、文在寅政権は同じ北朝鮮との対話の実現において、中国に頼ろうとはしなかった。何故なら彼等にとって中国は、北朝鮮での影響力を争うライバルだったからである。文在寅政権は中国との経済的協力についても積極的な姿勢を見せなかった。それは前任の朴槿恵が、大量の財界人を引き連れて訪中し、華々しい経済外交を展開したのとは、明らかに一線を画していた。

背景にあったのは、朴槿恵政権末期に本格化した T H A A D（終末高高度防衛ミサイル）の韓国への配備を巡る中国との対立と、実質的な経済制裁に他ならなかった。結果、この時期、韓国人の中国への好感度は大きく後退し、企業は中国への依存を減らすべく、投資や市場を他国・他地域へと分散させた。結果、この 5 年間、韓国での中国経済への依存度は頭打ちとなり、それが政府の対中政策への自由度を増やしめる効果を齎した。因みに同じ時期、日本経済の中国への依存度は上がっているから、韓国との違いがわかる。

中国への警戒感を持ちながらも、アメリカが主導する対中包囲網への参加には消極的な姿勢に終始する。矛盾して見える文在寅政権の外交の基盤にあったのは、究極的には、自らの国力に対する低評価だったと言える。中国は信頼できない相手であり、信用し、依存度を増すのは間違っている。とはいえ、それが大きな脅威である以上、徒に刺激するのも合理的ではない。だからこそ、韓国は中国を取り巻く状況から出来るだけ距離を置き、朝鮮半島を巡る問題にのみ専念すれば良い。米韓同盟は北朝鮮に対する「限定同盟」であるべきであり、その活動の範囲を広げても、韓国の負担が大きくなるばかりで得られるものは少ない。

とはいえ、この様な自らの国力に対する低評価は、これまでの政権においても見られた事

だった。そしてこの点を理解して初めて、韓国の新政権が行おうとしている事の意味が分かる。冒頭の尹錫悦の外交ブレインの文章からもわかる様に、この政権の外交政策の背景には、自らの国力に対する自信があるからだ。彼等は言う。これまでの韓国は自らの国力を過剰に小さく見積もり、狭い朝鮮半島に閉じ籠って、自らの身を守って来た。とはいえ、それは韓国が国際社会における活躍の機会を失う事をも意味していた。しかし、今や韓国は嘗ての様な「小国」ではなく、国際社会で様々な役割を担う力を有する「大国」である。だからこそ、その国際社会での活躍もまた、朝鮮半島周辺の範囲を大きく超え、広く世界へと目を向けるべき時に来ている、と。

こうして見ると、新政権下が志向する外交政策の変化が、単なる進歩派から保守派への政権交代以上の大きな歴史的意味を有している事がわかる。それは、嘗ては植民地支配に苦しみ、独立後も冷戦下における民族の分断や戦争、更には深刻な経済難の中、ユーラシア大陸に東北端に位置する朝鮮半島にて生き残る事に汲汲として来たこの国の人達が、いよいよ国際政治、更にはそこにおけるパワーゲームに積極的に関与しようとしている事を示唆しているからだ。現在の韓国はその経済規模においては世界第10位。彼等より大きなGDPを有するのは、G7の7か国と、人口大国である中国とインドだけだ。軍事費の規模も、2020年段階で世界10位。G7の一員であるイタリアやカナダは、既に韓国の下にいる。軍事費はコロナ禍でも拡大を続けており、2021年には日本を追い抜き、ドイツやフランスの規模に迫っている。韓国が、嘗ての様な、極東の貧しく不安定な「小国」ではない事は最早明らかだ。

それでは韓国は、ここからどこに行くのだろうか。考えられるシナリオは三つある。一つ目のシナリオは、新たな役割の拡大を限定的なものに留めていく事だ。同盟国であるアメリカとの関係が、韓国の安全保障において最重要であるのは明らかであり、政権を支える国内の保守派世論も良好な関係を求めている。しかしそれは同時に、アメリカとの関係さえ良好であれば、アメリカが朝鮮半島外でどの様な外交的姿勢を取ろうとも、韓国が直ちに大きな影響は受けない事を意味している。

この様な状況下、韓国が闇雲に国際社会での新たな役割を求めても、負担が増えるのみならず、アメリカやその同盟国・友好国との関係に、寧ろ新たな亀裂を齎す可能性すら存在する。加えて、現在のアメリカはウクライナ問題で手一杯であり、中国への積極的な対抗措置を取る余裕がある様には思えない。つまり、現段階で、アメリカが韓国に何かしらの具体的な役割を求めてくる可能性は大きくない。だからこそ重要なのは、アメリカが打ち出す「対中国包囲網」の中で、いつでもこれに協力する「ゼスチャー」を示す事であり、それ以上を追及する事は不必要であり、また、寧ろ有害な可能性すらある。だから、口だけで協力を表明し、受け身の姿勢に終始すればいい、という訳だ。

これに対して、自らの戦略的立ち位置をより積極的に変えていくシナリオもある。韓国に

とって中国の脅威は現実であり、だからこそアメリカがウクライナ問題等で手一杯な状況である今こそ、自らこれを補完する役割を積極的に果たしていくべきであり、そうしてこそアメリカのみならず周辺国からも大きな信頼が得られる筈だ、と考え行動するのである。この場合、視野に入ってくるのが、クアッドやCPTPP等の「対中国包囲網」に関わる枠組みへの積極参加であり、新政権とその関係者は既にその意向を明確に示す事となっている。それは即ち、韓国が自らのこの地域での国際的地位を、日本やインド、オーストラリアと同じ立場にまで高める事を意味している。この場合、経済的のみならず軍事的にも韓国の活躍の範囲は飛躍的に増大し、場合によっては、朝鮮半島近海を離れ、東シナ海や南シナ海、更にはインド・太平洋地域における積極的な軍事力の展開も試みられる事になるかも知れない。言わば「地域大国 (Regional Power)」への道である。現在の尹錫悦と周辺の人々の言動から判断すると、この政権がこのシナリオを選択する可能性は大きい。

しかし、彼等にはそこからさらに活動の範囲を広げていくシナリオもある。即ち第三のシナリオは、韓国がその活動の範囲を、インド・太平洋地域をも更に超えて、全世界的規模まで広げて行くものである。言わば「世界規模の大国 (Global Power)」への道である。試金石となるのは言うまでもなく、ウクライナ紛争になるだろう。現在の文在寅政権は「西側諸国」の一員として、ロシアへの制裁やウクライナからの難民受け入れ等において他国と歩調を合わせる一方、この問題についてそれ以上の積極的に関与する姿勢は見せていない。背景には、韓国世論の朝鮮半島を遠く離れた欧州における事件への、相対的に低い関心が存在し、例えば日本と比べた時、その違いは鮮明である。つまり、現段階では韓国世論にこの「世界規模の大国」への道を目指す準備があるようには思えない。

しかし、韓国が真に国際的に信頼され、世界的に影響力がある国に成長するには、これらのアジア太平洋地域を遠く離れた問題に対する能動的な関与も必要であり、そうでなければ韓国がG7の国々にまで肩を並べる事は不可能である。そうして、政府が自ら積極的に国際問題に関与する事で実績を作り、韓国世論を変えていくのである。その為には例えば、日本には憲法上の制約により困難な、ウクライナへの軍事支援の可能性も生まれてくる。朝鮮戦争が依然として国際法的に休戦状態にある韓国においては、軍事的活動への世論の警戒感是比较的小さいからである。「世論など政治的リーダーシップによりどの様にでも変えていける」。新政権関係者の一部からは、そんな威勢の良い声も聞こえてくる。

この三つのシナリオは、即ち、韓国がどこまでの国際的な負担を引き受け、それにより国際的な威信を得るかの違いを意味している。さて、尹錫悦政権と韓国の人々は、その準備と覚悟はできているのだろうか。キックオフはまもなく、新しい政権とそのブレイン達のお手並みを拝見しようではないか。